

「按針祭」で艦艇広報 静岡・伊東市



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）は、8月9日（金）から11日（日）の間、伊東市で開催された「第73回按針祭」を支援した。按針祭は、日本にはじめて訪れたイギリス人で日本初の洋式帆船建造に尽力した三浦按針（ウイリアム・アダムス）を顕彰する目的で行われており、自衛隊は例年市内各所で開催されるイベントに参加して祭りを盛り上げている。

伊東港耐震岸壁には、海上自衛隊の水中処分母船3号が寄港して一般公開を実施。その隣では陸上自衛隊駒門駐屯地（御殿場市）の第1戦車大隊が96式装甲車や救急車の展示を行ったほか、静岡地本が募集広報ブースを設置して子供用制服試着などを行い、白い制服を着て「船の人と同じ洋服だ」と喜び子供から「掃海艇と水中処分母船では活躍する場面が違うのですね」「自衛隊の救急車は担架4個を同時に運べるのですね」と、装備品の能力に感心しながら見学する大人まで、幅広い年齢層の家族連れが来場して祭りを楽しんだ。

一方、なぎさ公園で行われた太鼓合戦には、航空自衛隊浜松基地（浜松市）の「龍武太鼓」が参加。夕暮れの海岸で勇壮な太鼓演奏を披露して来場者の魂を揺さぶるとともに、「航空自衛官の後輩を募集中です」と隊員募集PRも忘れなかった。また、観光会館で行われた記念コンサートには、海上自衛隊横須賀基地（神奈川県横須賀市）の横須賀音楽隊が参加。ジャズやマンボなど多彩なアレンジを加えた楽曲で来場者を魅了し、曲の合間に「みなさんの目の届かないところで我々海上自衛官は頑張っています」と紹介すると、会場からは「頑張れ！」との声援も。最終曲後はアンコールの拍手が鳴り止まず、会場は大いに盛り上がった。静岡地本は、今後も地元イベントで多角的な支援を実施し、自衛隊の組織や任務、親近感の向上を目的とした広報活動に邁進していく。

潜水艦「うずしお」艦長が母校の後輩を激励



自衛隊静岡地方協力本部（本部長・宮川知己一等空佐）は、8月24日（土）、清水港袖師埠頭（静岡市）に入港した潜水艦「うずしお」の特別公開に、静岡県立磐田南高等学校（磐田市）の生徒を引率した。

これは、「うずしお」艦長の久保田真紀2等海佐が同校の卒業生であることから、静岡地本長が同校を訪問して、特別公開への参加を学校長へ案内。2、3年生の生徒16人と教職員3人が参加した。

生徒たちは同校先輩の久保田艦長とともに潜水艦の前で記念撮影をした後、いよいよ艦上ハッチから水面下にある艦内へ。まず幹部専用の士官室で、久保田艦長自ら潜水艦の任務や同艦の機能、潜航の原理などについてわかりやすく説明した。さらに、自身が市ヶ谷防衛省の海上幕僚監部で勤務した経験などを踏まえ、一般大学卒業後に幹部候補生として入隊し、諸外国や他省庁との交渉をはじめ計画作成や予算獲得まで幅広い業務ができる幹部自衛官のキャリアパスを紹介。「将来はジェネラリストとして日本のために活躍してほしい」と後輩たちを激励した。

そして艦内奥に進み、航行指揮や舵をとる発令所、エンジンルーム、乗員の就寝などに使う居住区や食堂などを見学。イスの下に野菜を入れるなど限られた空間を有効活用する収納法や節水の大切さ、音で存在を気づかれないように大きな音を出さない工夫などを、乗員がユーモアを交えて説明した。更に、昨年末から女性にも潜水艦勤務が開放され、今回も女性自衛官が試験的に乗艦しており、生徒たちは隠密な任務ながらも男女の差なく仕事ができる潜水艦勤務への理解を深めていた。

見学を終えた生徒たちからは「潜水艦は乗員一丸となって取り組んでいて、仲間同士の信頼関係を感じました」「乗員の方々がとても気さくで明るく、堅いイメージが変わりました」「国防の最前線で任務に就けることにとても魅力を感じました」などといった感想があった。

静岡地本は、今後も部隊と連携し艦艇広報等あらゆる機会を活用した積極的な広報活動に努め、学生や学校関係者の自衛隊に対する認識と理解の向上に全力を尽くす。